

～支部事務局のご案内～

北海道医療ソーシャルワーカー協会は9つの支部によって構成されています。詳しくはお近くの各支部事務局へお問い合わせ下さい。

・中央A支部(南区・豊平区)
〒062-0034
札幌市豊平区西岡4条4丁目
1-52
西岡病院 医療相談室内
TEL 011-853-8322
FAX 011-853-7975

・中央E支部(西区・手稲区・小樽・倶知安・岩内・余市など)
〒063-0811
札幌市西区琴似1条5丁目1-1
静和記念病院
地域医療連携室内
TEL 011-611-1111
FAX 011-611-1127

【北支部】(旭川・富良野・北見・網走・紋別・稚内・滝川など)
〒096-0031
名寄市西1条北5丁目1-19
名寄三愛病院 医療福祉課
TEL 01654-3-3911
FAX 01654-2-1555

・中央B支部(北区・中央区・石狩など)
〒060-0062
札幌市中央区南2条西19丁目
同交会病院 医療相談室内
TEL 011-611-9131
FAX 011-611-4537

●札幌支部連絡協議会
〒060-0001
札幌市中央区北1条西9丁目
リンケージプラザ4F

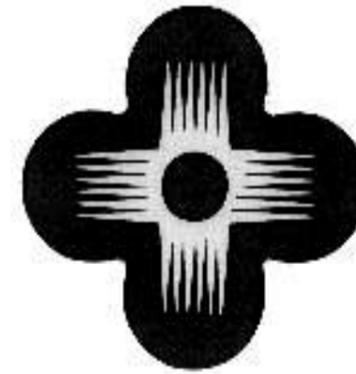
【南支部】(函館・八雲・瀬棚など)
〒042-8511
函館市駒場町9-18
富田病院 生活支援室内
TEL 0138-52-1112
FAX 0138-55-2243

【東支部】(釧路・帯広・根室など)
〒085-0007
釧路市堀川町8番43号
老人介護支援センターひまわり
居宅介護事業部
TEL 0154-24-2133
FAX 0154-23-7665

・中央C支部(白石区・東区)
〒065-8611
札幌市東区北12条東3丁目
3-31
天使病院 医療社会事業課内
TEL 011-711-0101
FAX 011-751-1708

【日胆支部】(室蘭・登別・伊達・苫小牧・洞爺・白老・浦河など)
〒053-0054
苫小牧市明野新町5丁目1-30
苫小牧東病院 医療相談室内
TEL 0144-55-8811
FAX 0144-53-6111

・中央D支部(厚別区・清田区・北広島・江別・恵庭・千歳など)
〒068-0030
岩見沢市10条西21丁目1-1
岩見沢北翔会病院 相談室内
TEL 0126-32-2188
FAX 0126-32-2155



第20号

平成17年7月25日発行

ぱぶりけーしょん

事務局 北海道医療ソーシャルワーカー協会
札幌市中央区南4条西10丁目
北海道病院センター内
<http://sar-jp.com/msw/>

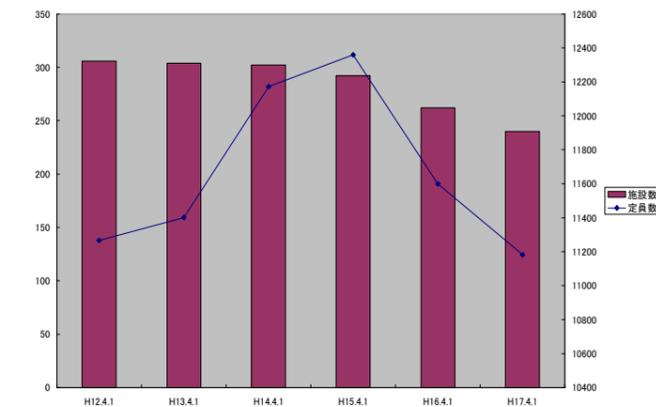
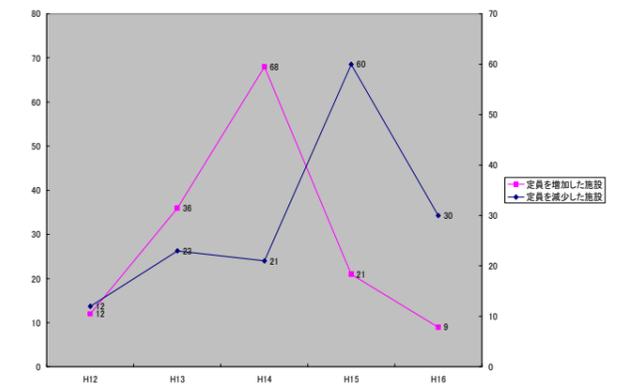
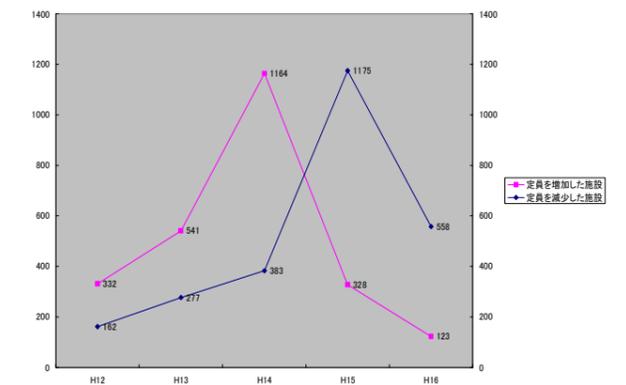
巻頭言：北海道の指定介護療養型医療施設の現状

医療福祉活動部 部長 岡 大輔

北海道が介護保険事業計画で示した目標数14,345人に対して当初の三年は順調に施設数、定員数共に増加傾向にあったが、平成15年度以降は減少傾向にある。別表にあるように、指定取り消しで定員数が減少しているものではない事は明らかである。(表およびグラフを参照)

医療施設は知っての通り、病院、診療所などが医療保険から介護保険に変換したものであり、介護支援専門員を必置とし、医療ソーシャルワーカーも様々な立場になっていると予想される。

このような変化の中で、医療ソーシャルワーカーの業務について、説明する施設基準や料金体制については変化があったと思うが、患者・利用者の立場に立って相談援助をしていることには変わりはないと考え、現状報告と現場医療ソーシャルワーカーの一言とした。



(北海道保健福祉部 介護保険課調べ)

“急性期病院の現状とソーシャルワーク”

柏葉脳神経外科病院 寺田 香

「それで、いつまでこの病院においていただけるのでしょうか？」先々の療養についての面接場面で、必ずといってよいほどご本人やご家族の問い掛けを受けます。「全て解決して安心して退院が出来るまで」という回答が困難となつてから、どの位の月日が経ったのでしょうか。第四次医療法改定（2000年）を受け、病床の機能分化は加速度を増しました。臨床現場のソーシャルワーカーは、在院日数の短縮という命題を背負いながら、退院促進の役割と病床機能に見合った患者さんの振り分けを担わされています。

最近、当院からの転院相談をさせていただいている医療機関から、病床転換の連絡を相次いで受けました。介護保険病床から医療保険病床へ、更に療養病床から一般病床へ、それぞれ病床区分を変更しますという内容でした。おそらくは経営上の方針であったり、その地域から求められる医療機関の役割であったり、諸々の条件が加味されての病床転換であったことが推測されます。

急性期病院のソーシャルワーカーとして、転院の調整を図るにあたっては、相手先の医療機関が持っているさまざまな特性を十分押さえた上での転院先選定を心がけていますが、病床が転換されることによって、自分たちの業務が何か大きく変化してきたかと問われると、その実感はあまりありません。実際には、病床転換による変化（例えば医療費負担額の変更、等）を患者さんやご家族へ説明したり、医療機関の機能が変化したことから生じる受け入れ患者層の変更や転院相談の可否など、若干の影響はあります。ただそれは病床転換という変化に伴う「想定範囲内」の変化であって、業務を根底から脅かすような脅威とはなり得ません。ソ

ーシャルワーク業務というもの本来兼ね備えている“共感→アセスメント→介入”という機能が、転院相談先の病床転換という事態にも有効に働いているのかもしれない。

むしろ、時代が動いているということに無自覚なまま、先の見通しを立てられずに業務にあたることの方が脅威かもしれない。ソーシャルワークの歴史を踏まえ、現状を分析し、この先の変化にどのように対応していくのか、そのためにいま何が求められているのか、自分の足元を見つめなおす作業が大切かと考えています。

構造改革に伴う病床変換の中での

MSW の価値と考え方

輪厚三愛病院 住吉 誠



当院は一般病棟25床・医療療養病棟48床・介護療養病棟73床、合計146床の療養病院であるが、昨今の保健医療の構造改革に伴い、また当院入院中の方のADLなど状況を踏まえ医療の管理及び、介護の必要性を考慮し平成17年3月末に介護保険ベットを返還し、医療保険ベット（特殊疾患入院施設管理加算）が4月1日より開始となった。

また看護基準も6:1 4:1から5:1 4:1へとなりクライアントへの対応を今までよりも質を下げないでより過ごしやすい環境を提供できるように当院では日々目指し努力しているところであるが、介護保険病棟の変更となると全員（クライアントやそのご家族様など）へ当院の主旨を説明し、そして同意を貰うことが必要となる。よってまずソーシャルワーカーとしての働きかけが始まるのだが、なかには介護から医療へと保険が変わることにより入院費の相違も発生するケースもあるために説明と同意のみならず様々な制度の活用も視野に入れながら面接を行う必要があった。

この時私は今回の病床変換に伴い、改めてMSWとしての倫理を考えた際、「クライアントの利益の優先」を考えなおす機会を得た。ソーシャルワーカーは「職務の遂行に際して、クライアントに対するサービスを最優先に考え、自己の私的な利益のために利用する事があってはならない。また、専門職業上の知識や技術が、非人間的な目的に利用されないよう自戒する必要がある」と述べられており、またソーシャルワーカーの諸氏は職務上常に念頭に置き対人援助を行っている。しかしその援助を「与える側」と「求める側」という関係に位置づけしたとき、クライアントの立場はともすると弱い物になりがちであり、人は知らず知らずのうちにこうした弱い立場を利用して相手の利益ではなくて、自分の利益を守ろうという気持ちになりかけはしないだろうか。

またソーシャルワーカーも専門職であり病院という組織の利益を守るために働く組織の一員でもある。しかしここで考えたい。私たちがまず我々が第一に考える事はクライアントの利益であり、それに伴うようにソーシャルワーカーには数々の役割もある。これらはベッドが変換されて病院内の環境が変わったとしても、ソーシャルワーカーとしては特段何かを変えなくてはならないことはないはずであり、多少院内組織の方針が変わったにしてもである。

平成17年7月4日の北海道新聞には厚生労働省から、「緊急の手術や治療を必要としない患者が長期入院している医療型療養病床について、食費や光熱費などの居住費に対する公的医療保険の給付を見直し、高齢の入院患者は自己負担する方向で検討に入った。6月に改正介護保険法が成立し10月からの介護療養型医療施設に自己負担が導入されるため両制度間の整合性を図る考え。」という記事が掲載されていた。日々急速に変わりゆく社会状況、とりわけ保健医療もそうであるが、その中で医療保険・介護保険制度内での運営において病院や介護施設等も一般企業と同様に専門性や質の向上、またそれに伴い経営や利益についてもそれぞれ求められてきている。ソーシャルワーカーとしてその倫理を改めて見つめ直し、かつ柔軟に対応しながら今と変わらないスタンスでより質の高い援助を行っていく事が今後必要である。

私達ソーシャルワーカーという立場上、組織と倫理の狭間で心が揺れ動いてしまいがちであろうかと思うが、私達には援助を必要としている、あるいは病院や施設を求めているクライアントの立場に立ちながら利益を優先していくこと、そしてソーシャルワーカーは援助する相手と同じ立場に立ち、同じ方向、同じ物を見つめていくことを決して忘れてはならない。これこそが大切であると考えます。